

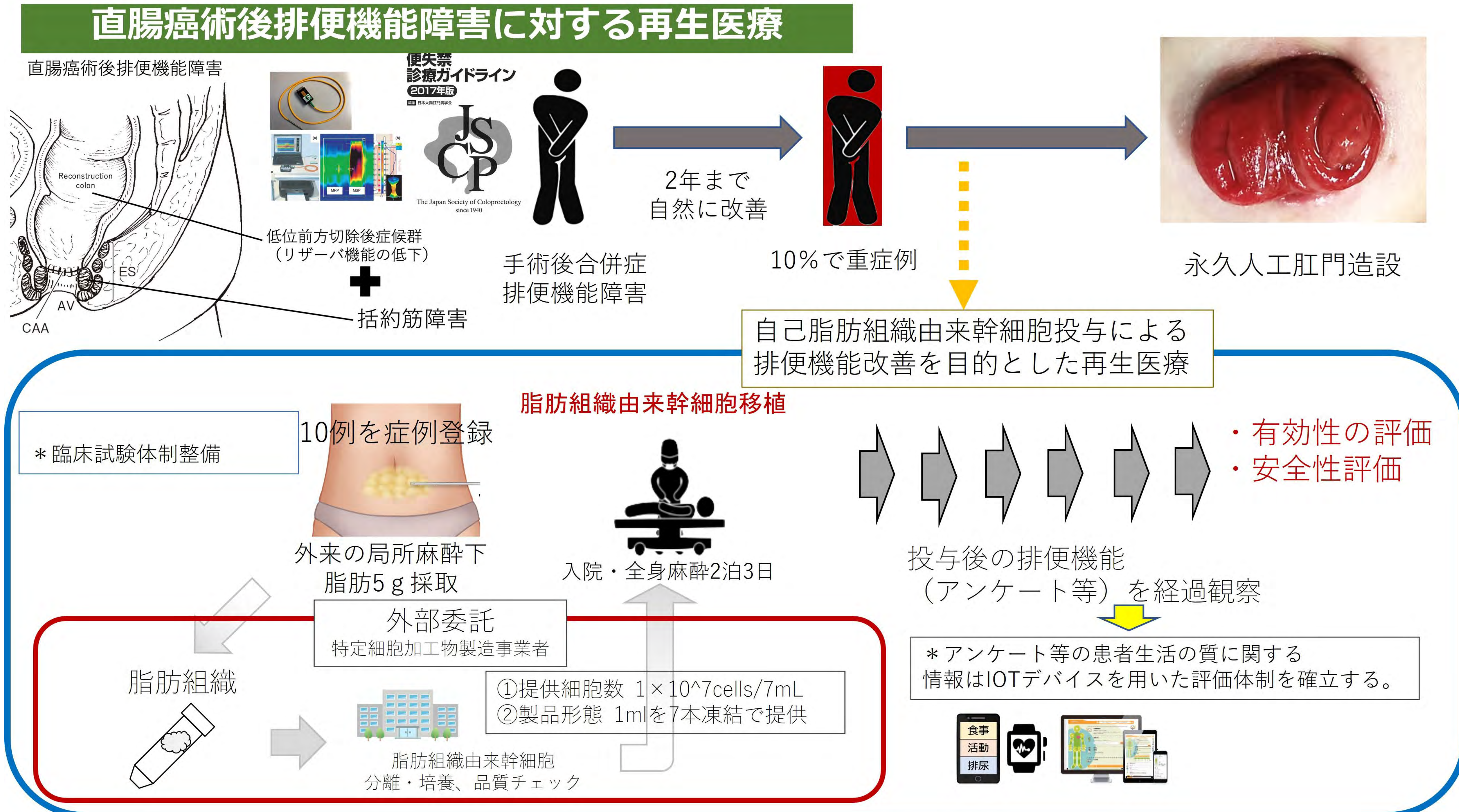


臨床的ニーズ

- 直腸癌の罹患数は国内で6位と多い。
- 肛門温存直腸癌手術の術後排便機能障害の割合は**80-90%**である。
- 年々増え続けているこれらの患者に対する治療法は、有効な結果が得られない場合は永久人工肛門の造設である。
- 肛門機能に対する再生療法の確立は、人工肛門の回避に繋がるため、人工肛門造設による物理的・心的負担を取り除くことができ、QOLの大幅な改善に繋がる。

「直腸がんが治って、おしりも残ったからよかった」ではない！

研究開発コンセプト

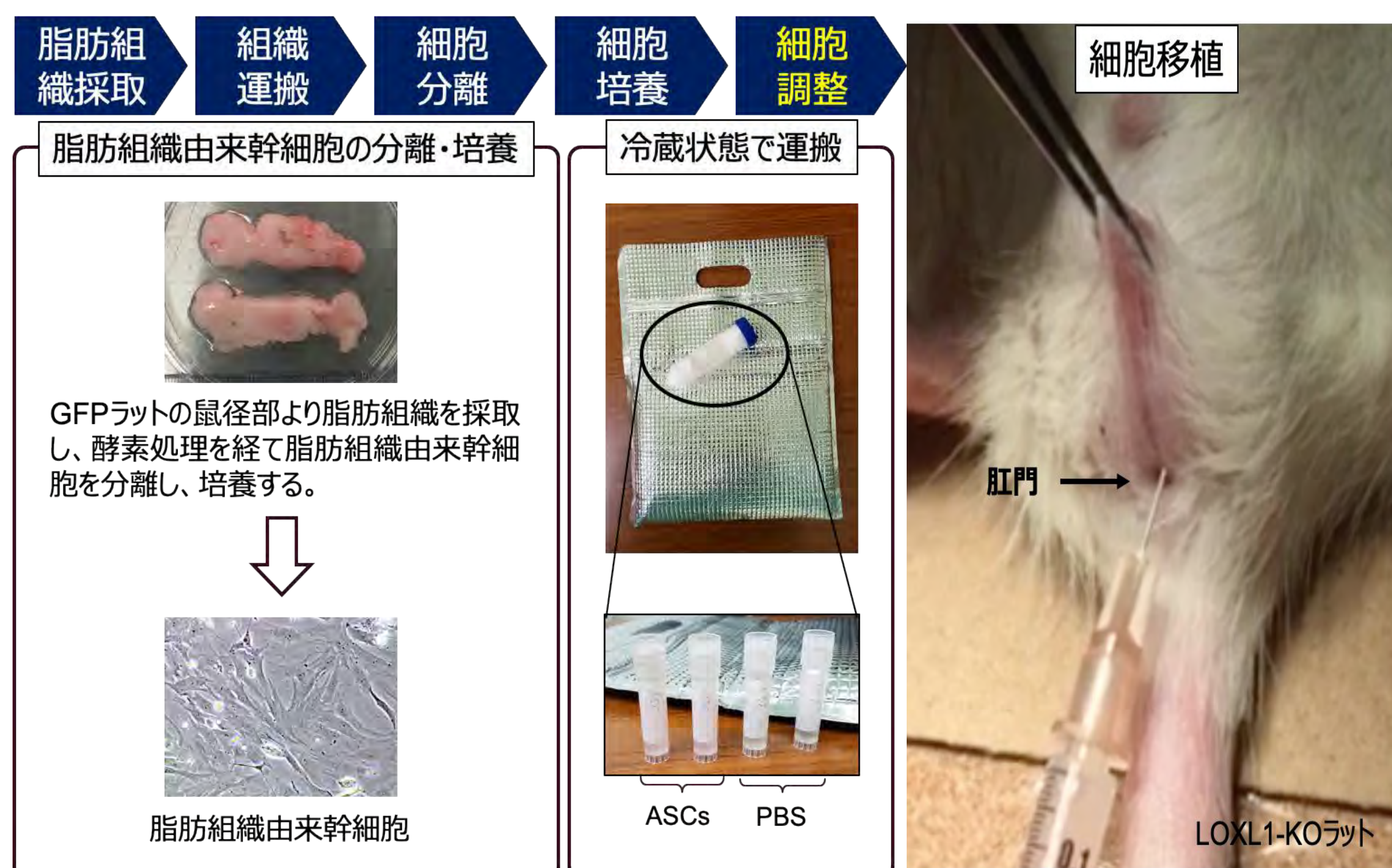


下部直腸がんの術後排便機能障害を罹患した患者を対象に、患部に自家脂肪組織由来幹細胞 (ASCs) と脂肪組織などの足場を移植し、自家組織を再生・増殖させることで肛門内圧を上昇させる。

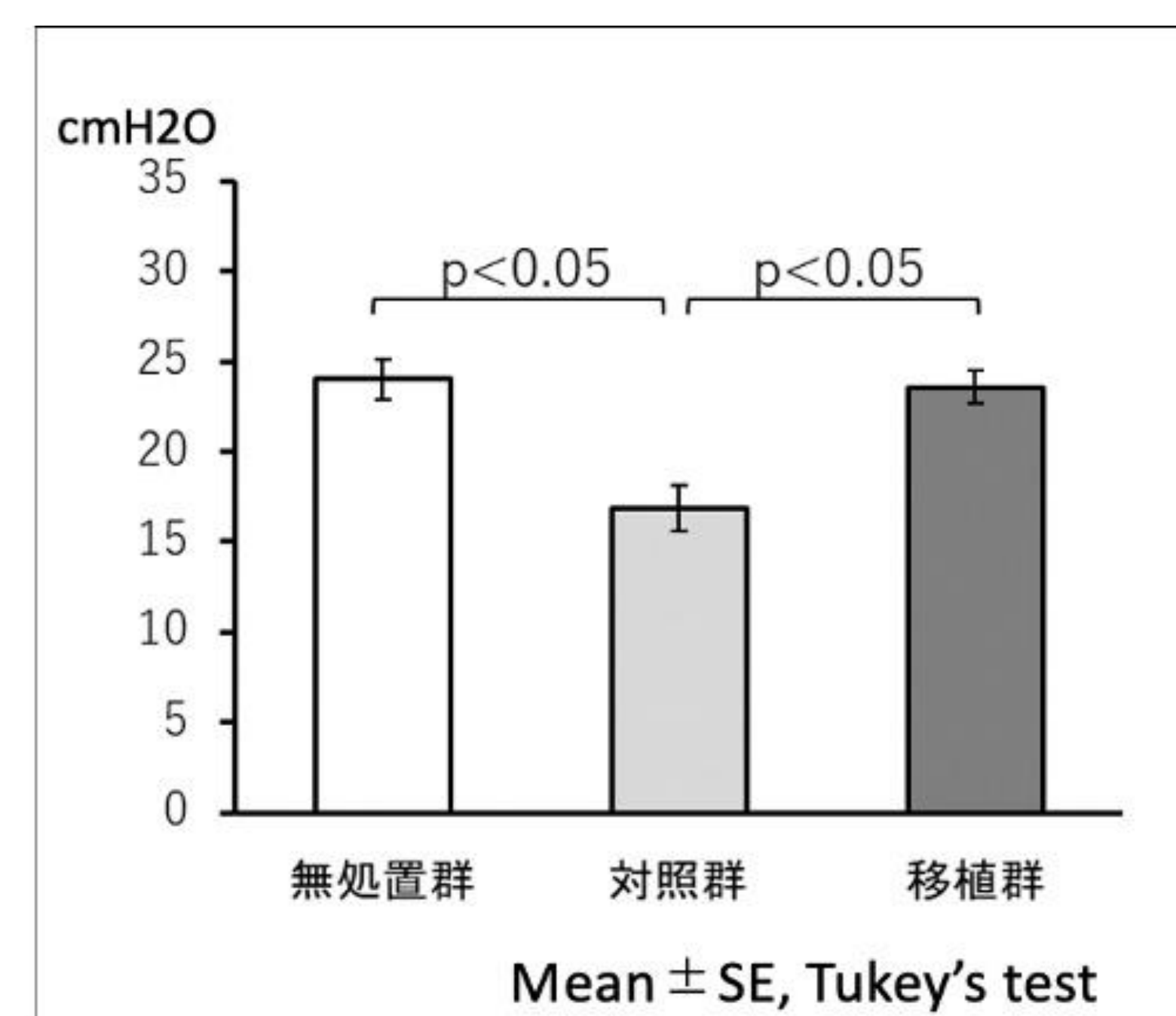
新規性・優位性

- 最終的な解決策としては人工肛門を造設する以外に有用な治療法が存在しないことから、ニーズに対する本研究の優位性は高い。
- 加齢に伴う便失禁 (本邦では65歳以上の男性8.7%、女性6.6%と多い) も本治療の対象となり得るため、市場性は高い。
- 脂肪組織由来幹細胞 (ASCs) は、
 - ①採取が容易で低侵襲である。
 - ②増殖能が高いため移植するのに十分な量の細胞を確保できる。
 - ③凍結保存に対する耐久性も強いいため、複数回移植が可能である。

これまでの研究成果



便失禁モデルラットにASCsを移植し、肛門閉鎖圧を測定した結果、便禁制効果を高めることが明らかになった。



「組織再生用組成物の製造方法および製造装置」
◆特願2023-023324
◆PCT/JP2024/005766

【本研究は、AMEDの課題番号JP23ym0126804により支援された。】

